

* 井上四郎氏の情報の追加 (新星発見、内村鑑三との関係)

井上四郎氏は元東京天文台職員で、東京天文台百年史によれば在職期間は、大正9年～昭和7年2月とある。しかし、明治42年(1909年)6月5日に催された初代東京天文台長寺尾寿博士の東京大学教授在職満25年祝賀会に出席していることから、在職期間との矛盾に悩んでいたが、氏は東京天文台に勤務する以前からアマチュア天文家として新星発見などで知られており、1910年のハレー彗星出現の際には満州への観測隊派遣について一戸直蔵らと満州鉄道に助力を求める活躍をしたことが知れた。井上四郎について得られた情報の追加は以下のものである。

1) 中山茂著「一戸直蔵(野におりた志の人)」リプロボード刊のなかに井上四郎について2点の情報があつた。

一つは、新天体発見にまつわる記事で、一戸直蔵が東京天文台にいた頃は、ドイツに「天文発見電報同盟」という国際組織の本部がおかれていて、発見はすべて本部に電報で知らせ、そこで誰が第1発見者であるかを判定していた。その頃日本はまだこの同盟に加入していなかったため、日本人の発見の通報が遅れて、第1発見者の名誉を逸する事があつた。日本でも、熱心なアマチュアで日本天文学会に最初から参加していた横浜の井上四郎が1901年(明治34年)にペルセウス座に新星を発見したとして話題を呼んだが、通信の欠陥のために他の国の人に先んじられたと言うものである。

もう1件は、ハレー彗星の観測に満州に観測隊を送る計画を進めるに当って、当時の満州鉄道から金を引き出す算段のため、研究者の決意が大切であると若手研究者の衆議にかけて決心をした。この若手4人が平山清次、早乙女清房、それにアマチュアの井上四郎、そして一戸直蔵であつた。

2) インターネット上の涌井隆氏の「内村鑑三と星の観望」の文章のなかに、

1. 1920年3月17日の内村鑑三の日記のなかに「午後芝飯倉に東京天文台を訪ふた、数個の望遠鏡並に精巧なる新式の分光器を見せて貰い非常に有益であつた、後に事務室に於いて平山清次博士並に井上四郎君と宗教と天文との関係に就いて心置きない談話を交え誠に愉快であつた、之世離れたる事に於いて宗教と天文は能く似ている。」と言う文章がある。
2. また、1920年8月27日の日記には、「東京天文台井上四郎氏の訪問を受けた、氏の談話に照らして見てこのたび白鳥座に現はれし新星発見者の名誉は僅少の注意で余に落ちたのであつた事が判明して残念であつた、此名誉には自分ながら与りたかつた、余は変な星だなど計り思ふて之を直ちに天文台に報告しなかつたのが余の怠慢であつた。」と記している。

3) 在野の天文学史研究家の佐藤利男氏から、井上四郎氏は内村鑑三の新星発見に関係しているとの情報があった。この件が2)の事であろう。

4) またインターネット上に、「1920年8月にはくちょう座に2等星の新星が現われました。思想家内村鑑三や神田茂らが独立発見しています。」という文章があった。

5) またインターネット上に、「1920(大正9)年8月21日、1920年8月にはくちょう座に2等星の新星が現われました。思想家内村鑑三や神田茂らが独立発見しています。」

これらのことから、宗教家である内村鑑三が天文学に非常に近い存在であった事を知った。なお、写真1は井上四郎氏の東京天文台退職記念写真、写真2はトロートン望遠鏡と井上四郎、写真3は麻布時代のドームの前、右端が井上四郎氏である。



写真1



写真2



写真3